

2017年6月



蝶と鈴

緑が広がった河岸に腰をおろし、私は二匹の蝶が物憂げに何度もループを描きながら上空を舞っている姿を見つめていた。河幅は広く、流れは速かった。やがて、鈴が鳴る音に気づいた私は、その音がどこから聞こえてくるのかと対岸を見つめた。最初に見えたのはほんの二、三頭の牛だった。だが、すぐに他にも多くの牛が目に入ってきた。河岸の小道沿いにのろのろ歩いていた牛たちは、どれも首のまわりにカウベルをぶら下げていた。牛たちが集まって河から離れ、帰途につきはじめると、その鈴の音は次第に高まって大合唱になっていった。心に感嘆と感謝の念が湧き起こってきて、突如私はそこに存在していた。普段とは違う現実を生き生きと感じながら、私自身と自分の前に開けてくるその瞬間に気づいていた。

「おお、己自身を支えとしてゆったりと自足しているぼくの魂の喜びよ。かずかずの物質のおかげで己自身となり、それら物質への愛も忘れず、それらのものから、視覚、聴覚、触覚、理性、発言、比較、記憶、そういったものの一切から、震えを帯びつつぼくのもとへ立ち帰るぼくの魂。ぼくの感覚と肉体を踏み越えるぼくの感覚と肉体のまことのいのち。

物質はもう卒業したぼくのからだ、物質に見とれるぼくの間はもう卒業したぼくの視覚、究極的に見るのはぼくの物質的な目ではないことが、今日ぼくに一点の曇りもなく証明される...」
ウォルト・ホイットマン

自分の世界がたった二匹の蝶に集約された瞬間に私が気づかなかったのは奇妙だが、今こうして体験している状態では、その区別は明瞭かつシンプルであった。魅惑や白昼夢におちいるのは非常に容易であり、そのことに気づきすらしめないのが普通である。鈴の音が私の注意をひき、それにつづいて田園の魅力と風景の美しさが気づきの瞬間を呼び覚ましてくれたのは幸運であった。こうした気づきを呼び覚ますことは可能だろうか？そう、それは可能である。そうした技巧は、現在に存在して生きる方法を学びたいと願う人々に教えることだけを目的としたスクールで得られる秘教的知識の一部である。

人間として、私たちはただ誕生するだけで現在に存在する権利を受けとる。「プレゼンス」の瞬間は、私たちがそれに気づいているか、あるいは価値を感じているかどうかに関わりなく、あらゆる人の人生を豊かなものにする。プレゼンスの瞬間とは、私たちに記憶が生じる瞬間のことである。

「スクールでは、内なる神 — 自身のプレゼンスのために
適切な場所で努力を行えるという恩恵がある。」
ロバート・アール・バートン

驚くべきことに、普通の目覚めた状態からプレゼンスの状態へ移るときの違いの大きさを簡単に忘れてしまう。私たちの内面には、この内なる繊細な輝きを何か平凡なものへと貶めてしまう、どうしようもない傾向がある。毎日の活動がもつ勢いは、高い意識状態に対する価値感を鈍化させる、水平化の効果がある。私たちは人生の急流に流されている自分を見出す。— 恐れ、疾病、義務、金銭の必要性、欲望がもたらす興奮、手に入るか入らないか — こうした事柄は最も深い大望から私たちをそらしてしまうのだ。

「現在に在ることはすばらしい。...だが、我々は、笑いさざめく隣人たちが認めてはくれぬもの、羨んではくれぬものを忘れやすい。疑いの余地なきものとして、我々は隣人たちが認めた喜びを高く掲げようとする。

最も疑いようのない喜びが我々に顕わになるのは、ただ我々がそれを内面で変容させた時だけなのに。
愛する人よ、どこにも世界は存在しないだろう、内面に存在することの他に。」
ライナー・マリア・リルケ、「ドゥイノの悲歌」、第七の悲歌

幸運なことに、プレゼンスは美だけでなく、苦しみによっても生じる。おそらくあなたも、愛する人が地に落ちるのを眺め、生の微妙な秘密について垣間見たことがあるのだろう。時間とうわべの外見がいつのまにか消え、ある瞬間にヴェールがもち上げられる。

誰も望んではないことだが、人生の喜びはどうしようもなく悲劇や苛立ち、感情的な痛みとからみ合っている。この摩擦は、愛しい人を切望する私たちのハートに、ハートをかき乱す情念や激しい私欲を克服する機会を与えてくれる。そして人は、神的なプレゼンスの清澄さと平和を目指して進んでゆく力を受けとるである。

「あなたの頭上には新鮮なパンが入った籠があるのに、あなたはあちこちの扉をたたいてパンくずのお恵みを求める。

自分の内なる扉をノックせよ。他はどこもノックするな。河の新鮮な水に膝までつかって水をはねながら、

あなたは相変わらず他人の水袋から一口飲みたがっている。
あなたの周りのいたるところに水はある。
だが、あなたが見るのは水から遠ざける障害ばかりだ。」
ジャラルール・ウッディーン・ルーミー

執筆：シドニー・ラッセル